

(事例シート)

1. 世帯の経過と現在の状況

本人（28歳・男性）とその祖母（83歳）の2人世帯である。本人は、半年前から祖母の家で生活している。

祖母は、少し物忘れがあるものの、日常生活自立支援事業や介護保険サービスを利用しながら一人暮らしをしてきた。祖母は、近所づきあいは良好で、同じ町内会には親身になってくれる知人もいた。また、週2回のデイサービスを楽しみにしており、そこの相談員ともよく話をしていた。祖母は、早くに夫をがんで亡くし、一人娘（本人の母親）を郵便配達をしながら女手一つで育てた。当時、女性の配達員はめずらしく、「雨でも雪でも、自転車で山の上まで配達したんだ。男には負けなかった」というのが口癖である。

本人の母親は、祖母の知人から紹介された男性と結婚し、本人を含め4人の子どもをもうけたが、夫からの暴力が原因で離婚に至った。夫の暴力を知った祖母が母子を連れ戻したという経緯がある。祖母の話によれば、母親は幼少時に転倒して頭を強打したことがきっかけでてんかん発作が続くようになり、情緒不安定な面があったとのことである。離婚後、子育てができないほど不安定な状態に陥り、現在は市内のグループホーム（精神）で生活している。祖母が4人の孫の世話や経済面の援助をすることで、孫全員が高校を卒業できたことが自慢である。現在、本人以外の子どもたちは、それぞれ遠方で生活しており、お互いに交流することはほとんどない。

本人は、私立高校を卒業後、レンタルビデオショップやガソリンスタンドなどでアルバイトを転々としていた。車の運転が好きなこともあって、宅配の仕事をしたこともあるが、荷物の仕分けを間違えたり、電話の取次ぎがうまくできないことが引き金となって辞めることになった。その後、コンビニのアルバイト先で親しくなった女性との間に子どもができ、結婚するに至った。しばらく妻の実家で生活していたが、どの仕事も長続きしないこともあり、妻の親との折り合いが悪くなって離婚し、その後祖母の家に住むことになった。

2. 自立相談支援機関による訪問の経過

現在、本人はアルバイトもすべて辞め、一日の大半を自分の部屋で過ごしている。夜中に自分の軽自動車ですごかへ出かけ、昼ごろに帰ってくることもある。祖母を支援する日常生活自立支援事業の専門員が訪問すると、本人に小遣いを渡すため、祖母が臨時生活費の払い出しを求めることが多くなった。また、車の車検費用を出してやりたいという相談も受けた。一方で、「いつになったら働くのか！」と祖母が本人のいる2階の部屋に向かって怒鳴る場面もあった。専門員が祖母に自立相談支援機関（くらしサポートセンター）への相談を提案したところ、祖母が「ぜひそうしてほしい」と答えた。

専門員が市内の自立相談支援機関に伝え、相談支援員（33歳・男性）が専門員に同行して訪問することになった。

3. 初回訪問

初回訪問は、今から2か月前のことであった。10時に訪問すると、祖母が対応した。本人は2階の自分の部屋で寝ていた。1階の祖母の部屋に通してもらおうと、祖母の寝床には写真が数枚飾ってあった。その中には、赤ん坊の写真があり、聞くと本人からもらった写真で、そこには本人の子どもが写っていた。「あの子の目によく似てるんだ」と祖母は笑顔を見せた。

この日の訪問では、祖母から本人の話を聴いた。兄や姉に比べ、本人はとても手がかかる子どもだったと話した。学校へ行く身支度には時間がかかるし、忘れ物も多く、度々学校から連絡があり困ったとのことであった。また、友だちも少なく、祖母に買ってもらったゲームばかりをしている子だったと話した。「できは悪いけど、おつかいを頼んでも嫌な顔ひとつせずやってくれたよ」とも話した。相談支援員は、本人と面談をするために2週間後に再度訪問することにした。

4. 訪問2回目

2回目は14時に訪問した。この日は、祖母だけが在宅で、本人は昨夜遅くに出かけたとのことだった。祖母は本人に「くらしサポートセンター」の話はしていたようだが、この日に相談支援員が訪問することは本人には伝わっていなかった。祖母の部屋でしばらく話をしていると、たまたま本人が帰ってきた。相談支援員が挨拶すると、本人は目を合わさずに無言で軽く頭を下げた。祖母が「ちょっと座って話をしなさい」と言うと、上がりかけた階段に腰掛けた。

支援員：突然ごめんなさい。少しお時間いいですか。Aさん、おばあちゃんからくらしサポートセンターのこと、聞いてもらえましたか？

Aさん：なんのこと？

祖母：この前、話しただろ。仕事のこと、相談にのってくれる人だよ。

Aさん：ああ、仕事がなんとかって言ってたな。

支援員：おばあちゃんがAさんのことを心配されていると聞いてやって来ました。これから生活や仕事のこととか、一緒に考えさせてもらえたらと思っています。

Aさん：……。

祖母：なんでも話したらいいんだよ。仕事がないって困っていただけだろう。

Aさん：べつに話すことなんてないよ。

支援員：急に仕事の話って言われてもね、戸惑いますよね。少しずつでいいので、Aさんのこと、聞かせてもらいたいと思います。普段の生活のことや悩んでいることとか。

Aさん：悩んでいること？ あんたに話してどうかなるんですか？

支援員：くらしサポートセンターのことや私の役割とか、少し聞いてもらえますか？

Aさん：眠いのもういいです。今日は聞きたくない。

支援員：そうですね、今日はタイミングが悪かったですね。では、また出直してきますね。次回は、約束のうえで少し時間をとってお会いしましょう。

祖母：そうしてもらいなさい。あんたもどうにかしないといけないと思っているんだろ。ばあちゃんはいつまで生きているかわからないんだよ。

支援員：おばあちゃんも心配されているんですね。また来てもいいですか。

Aさん：いないかもしれないけどね。

　　今回の訪問は、祖母がデイサービスに出かける日とし、10日後に訪問することを本人と約束した。

5. 訪問3回目

　　3回目の訪問時、玄関のチャイムを数回押しても応答がなく、あきらめて帰ろうとした時に本人が出てきた。家には本人だけだった。1階の祖母の部屋に通してくれた。

支援員：会えてよかったです。誰もいないのかと思いました。待っててくれました？

Aさん：別に…。

支援員：この前は急にごめんなさいね。今日はお話しても大丈夫？

Aさん：ばあちゃんはいないよ、僕一人だけ。

支援員：Aさんと話すために来たんだから。お話できるの、うれしいです。
今日は、これまでの生活や仕事のこと、うかがえればと思います。

Aさん：ばあちゃんから聞いたんじゃないの？

支援員：はい、少しだけ。高校卒業してからガソリンスタンドやレンタルビデオショップで働いていたそうですね。

Aさん：いろいろやったかな。

支援員：宅配の仕事もされていたそうですね。このまちは道も狭くて、家も密集しているし、運転は大変でしょう。

Aさん：事故はしたことはないけど。

支援員：その宅配会社も辞められたそうですね。何かあったの？

Aさん：……。

支援員：仕事を辞めたことばかり聞いちゃいましたね。私たちは、仕事を辞めて生活のことで悩んでいる人たちの相談にのっています。これからのこと、一緒に考えていきたいのですが。

Aさん：これからのこと？ どうせこれからだって失敗ばかりさ。何をしてもダメなんだよ。

支援員：どんなことがあったのか、よければ聞かせてもらってもいいかな？

Aさん：レンタルビデオショップでは、返却されたビデオを元の位置に戻していないと、みんなの前で上司に何度も叱られた。おまけに先輩のミスまで押しつけられて。ガソリンスタンドでも、客が待っていると思うと焦ってしまい、軽油とガソリン

を間違えて入れちゃって、店長から大目玉。宅配の仕事では荷物を間違えるし…。
支援員：いろいろ失敗が続いたんですね。でも、Aさんにふさわしい仕事があると思いますよ。

Aさん：ばあちゃんもあんたも、仕事のことばかり。

支援員：また仕事のことを聞いてしまいましたね。仕事以外のことも相談していきませんか。Aさんのこと、もう少し聞かせてください。

Aさん：俺のこと？

支援員：はい。ゆっくりと相談していきませんか。

Aさん：……。

支援員：また、来ていいですか。

Aさん：来たって一緒だと思うけど。

支援員：じゃあ、また10日後に来ますね。

Aさん：今度はこないかもしれないよ。

6. 訪問4回目

4回目の訪問をすると、疲れた表情の祖母が「これ、見てください。こんなこと初めてなんです」と破れたふすまを指差した。2日前、小遣いをめぐって喧嘩になり、本人が暴れて蹴破ったとのこと。この日、本人は2階から降りて来なかった。

1週間後、本人と約束はしていなかったが、5回目の訪問をした。本人は2階にいる気配があった。祖母が何度か声をかけると、本人が降りてきた。その後すぐに祖母がデイサービスに出かけたので、本人と面談することができた。

Aさん：また来たんだ。

支援員：おばあちゃんが泣きながら、Aさんと喧嘩したことを話してくれました。Aさんのことが心配でやってきました。

Aさん：あんたが来てからというもの、ばあちゃんは俺に小遣いを渡そうとしないんだ。だからついイライラして…。

支援員：イライラしてふすまを蹴ってしまったんだね。

Aさん：…まあね。

支援員：そのイライラの原因は、お小遣いのこと？

Aさん：それもああるけど…。

支援員：その他にも原因はあるのかな？

Aさん：まあいろいろ…。僕が働けばいいんだろうけど、昔の失敗を考えると怖くなるんだよ。

支援員：少し仕事のこととは置いといて、日中の過ごし方を考えませんか。

Aさん：そんなこと考えたところで、働けるわけでもないし。もう構わないでください。